
非日常はお嫌いですか？

桜凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常はお嫌いですか？

【Nコード】

N5954X

【作者名】

桜凜

【あらすじ】

彼の名前は”れおん”
運動神経抜群、成績優秀・・・まさに”完璧高校生”と言うしかないだろう。
おまけにルックスも良い。

幸せそうな彼だか、嫌だった。
毎日が、いつもが。
彼にとってこれは非日常である。

彼は日常を望んでいた。
何も無い、平和な日常を。

だが……

高校の入学式で出会った少女がキツカケで彼の”日常”が”非日常”に。

彼の願いは叶わなかったのだった。

その少女は自ら”妖怪”と名乗った。
隣の少女は”妖精”と名乗り、
後ろの少年は”超能力”と名乗った。

彼は、非日常高校生であった。

＼登場人物紹介／ ネタばれ注意？（前書き）

初めまして、桜凜です．

小学生ですが何か？（え

主要人物４人を紹介したいと思います．

他の登場人物については最後に紹介します．

今回は美少年・美少女にこだわってみましたよ＾p＾

女の子の方が多いですね、登場w

＼登場人物紹介／ ネタばれ注意？

倉崎 れおん（くらざき れおん）

全体科目レベルS 1 - 1

身長 171.3？

体重 54.5？

出身中学 おうさきだいにがくえん 桜崎第二学園

本作の主人公で、成績優秀・ルックスよし・運動神経抜群のまさに完璧男子高校生・

だが鈍感で女子には興味なし・

家は諸星学園までバスで25分程のとある東京都内の高級マンションに住んでおり、妹と弟と三人で暮らしている・

母と父は海外で働いていて、母は有名な医者で父は三ツ星レストランのオーナー・

北程馬とは前から知り合いだったらしい・

古き能力を受け継いだ者？・

平日は黒ぶちの眼鏡で休日はカラーコンタクトをつけている・

メイド喫茶Love whiteの執事（従業員）・

諸星学園高等部生徒会生徒会長になる・

きみざき
木崎 ゆづり
悠李

全体科目レベルB 1 - 1

身長 161.3？

体重 51.7？

出身中学 諸星学園中等部

超能力者と名乗る可愛い系男子（シヨタ系男子）・

使える超能力は、念力・テレポート・パイロキネシス・これ等の超能力は完全ではない・

れおんの相棒的存在で同じマンションに住んでいる。
諸星学園高等部生徒会会計係になる。

篠塚 萌 しのつか もえ

全体科目レベル S 1 - 1

身長 160・2?

体重 43・6?

出身中学 第一魔導師学校（札カード科）

もう一人の主人公でもある、巨乳で笑顔が可愛い美少女。

倉崎れおんに一目ぼれ。

魔導師と妖怪が混ざり合った魔妖怪と名乗り、空狐と名乗る。

魔導師としては、魔法の札まじっくカードと言う魔法を使える。

入学当時は電車通だったが、倉崎れおんがバスだと聞いてバス通にした。

妖怪だと言う事もあり、家は妖怪屋敷になっている。

Love whiteで働いているメイド。

諸星学園高等部生徒会副会長になる。

竹内 純 たけうち じゅん

全体科目レベル B 1 - 2

身長 156・5?

体重 43・7?

出身中学 聖桜女学園 せいさくらじょがくえん

妖精、ウンディーネと名乗る地味で努力家の少女。

3DKのアパートに一人暮らし。

諸星学園高等部生徒会書記になる。

高橋 優子 たかはし ゆうこ

身長 167・6?

体重 48・2?

出身高校 諸星学園高等部

メイド喫茶、Love whiteの店長・オーナー。
元ヤンで、喧嘩は得意中の得意。

殻毬茄 凛 からまりな りん

全体科目レベルA 1 - 2

身長 159・3?

体重 45・7?

出身中学 聖桜女学園

メイド喫茶、Love whiteで働いてる。
倉崎家の父がオーナーのレストランで、シェフとして働いている。
メイド喫茶では、調理担当。

飯島 愛、舞（いいじま あい、まい）

全体科目レベル（愛・舞）B 3 - 3

身長（愛）161・7? （舞）164・2?

体重（愛）45・2? （舞）44・9?

出身中学 諸星学園中等部

メイド喫茶、Love whiteで働いている。
萌とは一番仲が良く、二人共顔が広く情報屋である。
悪戯好き。

近藤 秋 こんどう あき

身長 164・9?

体重 47・1?

出身高校 諸星学園高等部

メイド喫茶、Love whiteで働く大学生・

高校の時、いじめられていて優子に助けてもらった・

それから優子なしでは生きていけなくなった・

江島^{えじま} 理沙^{りさ}

身長 169・9?

体重 48・9?

出身高校 諸星学園高等部

メイド喫茶、Love whiteで働く大学生・

大学は秋と同じで、秋とは小さい頃からの友達（親友）である・

倉崎 ねおん・りおん（くらざき ねおん・りおん）・

全科目レベル（りおん）B 1・2

身長（ねおん）145・3? （りおん）163・1?

体重（ねおん）34・6? （りおん）56・8?

出身中学 桜崎第一学園

（ねおん）

れおんの妹・

水泳では数々の優秀な成績を残している・

エロい、変態、れおんLove・

（りおん）

れおんの弟・

チャライ、そして口説きが上手い・

森山^{もりやま} 唯斗^{ゆいと}

全体科目レベル S 3 - 3

身長 165.3?

体重 58.2?

出身中学 おんみょうちゅうがっこう 陰陽中等学校

萌（空狐）を追っている全国トップの陰陽師・

家は、陰陽師一族で唯斗だけでも1年間で100以上の大妖怪を滅
してきた・

愛、舞とは仲がいい・

プロローグ（前書き）

1この物語に登場する団体・人物・建物などは実在しません。
つまりフィクションなのです。

2この物語を書いているのは本Loveな小学生です。
難しい言葉は知らないので簡単な言葉で書いています。
文句があるかたは言って下さい。

プロローグ

妖怪や妖精、これは非日常アニメに登場するまったくありえない物体である。

だが、その非日常を望んでいる者もいる。そして望んでいない者も中にはいるだろう。

非日常とは何か。

つまり日常的ではないこと。当たり前ではないことの事を言うのだろう。例えを出すと タネもシカケもないマジック？の事を言うのだろう。

この世界にその様なマジックや手品は存在しないはずだ。存在していたら、それは幻と考えても良い。

他にも、何も使わずに体を浮かせられるとか物を一瞬で移動出来るとか。

それはありえない。

非日常と言えばやはり妖怪や超能力だろう。

妖怪とは日本で伝承される民間信仰において、人間の理解を超える奇怪で異常な現象や、あるいはそれらを起こす、不思議な力を持つ非日常的な存在のことである。

妖怪と言えばぬらりひょんだ。ぬらりひょんは妖怪の中の総大将とされたいがその理由はまだ分かっていない。

そして超能力。

通常の人間にはできないことを実現できる特殊な能力の事である。

有名な超能力は、レポートやテレパシーなど様々な超能力がある。超能力≡魔法と勘違いする者も少なくはない。

魔法と超能力はまったく違う。

魔法とは現実には不可能な手法や結果を実現する力のことである。

魔法を使うと言えば子供の間では魔法使いと言っだろう。残念ながら魔法使いはこの地球には存在しない。

シンデレラや人魚姫など、多くの童話に用いられている魔法だがそれはフィクションであって 魔法？と言っ非日常な言葉は存在しない。

そしてよくあるのが、「成績優秀でモテモテでイケメンな男の子」と言っ恋愛小説などの登場人物だ。

こんな素晴らしい男が居ると思っか？

居たのだ。

彼は嫌だった。

非日常が。

彼にとつての非日常は「成績が優秀でモテモテでバレンタインデーにチョコを10個以上貰う」と言っ事だ。

彼は鈍感な為に、友人に言われてから初めて自分がモテている事を知ったそうだが…

彼は平和な日常を望んでいた。

何もない、平和な日常を。

だが、ある一人の少女の登場により、彼の願いは叶わなかった。

プロローグ (後書き)

お借りした資料・ホームページ・Yahoo辞書 ウィキペディア

(1) 彼と妹と弟と諸星学園・

とある東京都内の高級マンションに彼は住んでいる。

「れおん兄ちゃんっ、早く起きてよ？」

「……ん……？」

れおん。

彼の名前は倉崎 れおん（くらざき れおん）。生まれた際に、父親が「砺蛭」……と漢字で懷けたが、母親が小学生になった時の事を考えて平仮名に直したそうだった。

倉崎れおんは今日、高校に入学する。

日常を望んで。

中学では成績優秀で学年でトップ、スタイル抜群で運動神経も良いと言う完璧な男子中学生とされていたが、本人はそれが嫌らしいのだ。

よく恋愛小説などにあるアレだ。

『バレンタインデーにチョコを5個以上貰う』

それ位に倉崎れおんはモテているのだ。

倉崎れおんにとって中学校生活は非日常だった。

『バレンタインデーにチョコを5個以上貰う』なんて事はあるえないからだ。

だが現実、去年の2月のバレンタインデーには女子からチョコを5個以上貰ってしまい、同じ学年の女子からではなく、1年や2年の女子からも数個貰ったそうだった。

倉崎れおんは女子からのチョコレートを素直に受け取り、ホワイト

デーにも手作りチョコをお返ししたが、女子には一切興味なし。

『自分がモテいる』と言うのは友人から教えてもらった事で知ったそうだが。

鈍感なのだ、倉崎れおんは。

普通の男なら『モテる』と言うのは嬉しい事だ。

だが、倉崎れおんにとっては何故か嫌だった様だ。

そんな倉崎れおんには妹と弟がいる。

「朝・・・か・・・」

「れおん兄ちゃん、おはようっ？」

妹、倉崎ねおん。

小学6年生ながら倉崎れおんにベタベタ、そして何より変態である。こんな倉崎ねおんだが、水泳に関してはバタフライ50mの全国大会にて銀メダルをとった実力だ。

「りおんはどうした？」

「りおん兄ちゃんだったらリビングに居るよ」

倉崎ねおんはそう言うと、何かを思い出したようにリビングへと向かって行った。

倉崎れおんはその後、制服に着替えリビングへと向かった。

「れおん、遅いで。」

「寝てた・・・」

りおん。

倉崎れおんの弟、倉崎りおん。

弟と言っても生年月日が2カ月違うだけであり、倉崎りおんも今日、れおんと同じ高校に入学する事になった。

「まさかりおんが高校に行けるとは思ってた。」

「そやな・・・。俺が高校行けるなんて夢みたいやわ。」

何故倉崎りおんは関西弁なのか。

理由があり、りおんだけ関西の中学に通っていた為だ。

「りおん、やめろ。」

「何がや？」

「その格好だ。」

りおんは外見からしてチャライ男だ。

黒いショートに髪に赤と青のメッシュ、制服を自分風にアレンジしてしまっている。

口説きが上手く、告白OK待ちの女子が20人いるそうだ。

「それにしても、諸星学園の制服ってカッコイイよね・・・」

れおん・りおんが通う事になった高校は、もろほしがくえん諸星学園高等部と言う高校だ。

エスカレーター式の私立学校である。

何故彼等がこの学校に入学する事になったのか。

親に強制的に決められ、受験させられたそうなのだ。

れおんは他に行きたい学校があったのだが強制的に諸星学園の受験を受けさせられてしまった。

りおんは高校は行かず、バイトをするつもりだったらしい。

二人は受験に受かってしまったのだ。

それは凄い。

私立のしかもエスカレーター式の学校に受かってしまったのは凄い。諸星学園高等部は小規模の高校であり、毎年の受験生は1000人を超えるが合格するのはその内の20人前後らしくかなりの確率だ。

諸星学園は、制服が可愛い・カッコイイとしても有名であり、細かいチェックのズボンに白いカッターシャツと、ネクタイで冬になるとこれにブレザーをはおる事になっている。

女子はリボンに白いカッターシャツ、そしてプリッツスカート。

冬服のブレザーは腰丈で可愛い。

女子も男子も、リボンやネクタイ、ズボン・プリッツスカートの色は選べる事になっており、女子は赤・ピンク・水色。男子は青・緑・黒。これも人気の一つかも知れない。

「人気なんやてな、諸星学園。」

「日常・・・」

れおんは予想もしていなかった。
これから始まる、非日常に。

(1) 彼と妹と弟と諸星学園・(後書き)

倉崎りおん・ねおんについては後で紹介します・

(2) 登場、母・父・

「あつ？それはいいから早く朝ご飯食べちゃって？入学式始まつちやうから？」

「あ。母さんと父さんは？」

倉崎家の父と母は海外で働いている為、一年に1、2回程しか帰って来ない。もしくは、子供に何かあつたら。(たとえば不良に絡まれたとか)こんな時にしか帰ってこない。

ちなみに母は有名な医者、父は三ツ星レストランのオーナーである。「帰って来るよ？」

だが今日、日本へ帰って来る事になっている。

「子供の入学式と卒業式だけは見たい？」との事で、れおんやりおん、ねおんにとっては10カ月の再会となる。

「早くれおんの顔見たいわって電話で言ってたよ？」

母、由美はれおん Love、つまり自分の産んだ子供の事が好きと言う事だ。

普通の好きではなく、恋愛感情が芽生えても可笑しくない好きだ。マザコンの反対である。

由美はれおんの為なら何でもやる。たとえエベレストを登る事でも地球を一周する事でも。例えばれおんが「これ、欲しい。」と言ったのなら由美は「分かったわ。」と言い、買ってしまうのだ。

一方、りおん・ねおんに対しては「駄目。」と言う。

「めんどいわあ……。れおん、どうするん？」

「どうもしない。」

ダッダッダッ

足音。

「れ・お・ん？？」

足音の正体、それは倉崎家の母、由美のものであったのである。由美はれおんに抱き付き、これでもか．．．と言う程に頬にキス、そして頭を何度も撫でた。

その光景を見たりおん・ねおんは啞然とし、りおんはベランダへ行き「あああああああ」と大きな声で叫んだ、ねおんはその場に倒れ込んだ。

「れおん、怪我してない？何か困ってない？欲しい物ない？」

「ない。父さんは？」

「．．．仕事ですって．．．。子供の入学式位日本に帰ってきてくれれば良いに．．．。まあ良いわ。れおんに会えただけでも嬉しいですもの！」

そう言った途端、またりおんはベランダで「ぎゃあああああああああああああああ」と叫び、ねおんは復活したかと思えたがそのままアフター。

それ程れおんへの愛が深いと言う事である。

「りおん、ねおん、落ちつけ。」

「落ちつけねーよ？」

「まあまあまあ、三人共やめなさいよ。」

「「お前のせいだろうが！」」

* * * *

別の場所では、計画が進み出していた。

「倉崎れおん．．．．面白そうな子．．．」

彼女はそう言い、不気味に笑った。

(3) 入学式と出会い

あれから制服を身につけ、車に乗った四人は入学する事になった諸星学園へと向かった。ねおんはルンルンと鼻歌を刻み、れおんはメイズ雑誌をパラパラと読み、れおんは携帯をいじっていた。

「着いたわよ。」

そこはどこかの国の城かと思う程に高い校舎、そして綺麗な校庭に門。これはどこから見てもどう見ても学校ではないだろう。そんな学校にれおん・りおんは入学するのだから凄い。

最初に説明したとおり、諸星学園の試験は超難関で合格した者は天才と言っしかないだろう。そんな者達が来る高等学校、諸星学園である。

ねおんは「く」と鼻歌を刻んだまま、熊の人形を抱いて車のドアを開け、りおんは「着いたんやな

」と呟きドアを開け、れおんは母、由美にドアを開けられて車を出た。

すると、ねおんがある事に気付いた。

「お母さん、なんか視線が凄くない？」

「そうかしら？」

それもそうだ。

美少年とされているれおんに外見はチャライが顔はまあまあイケてると言っりおん、そしてロリ系小学生ねおん、スカウトは当たり前前の母、由美……この四人が歩いているのだから。

そんな事なぞ、れおんは無視。真っ直ぐ、体育館に向かって歩き出した。

そして受付をし、れおん・りおん・ねおん・由美はそれぞれの席についた。どうやら席はクラス順で出席番号順になっているらしい。れおんがぱっと見たところ、席の数で判断すると

今年の新入生は60人と平均より大幅に多い数だ。三クラスあり、一クラス20人程度だろうか。

開始30分前とだけあって、来ていない者も沢山いる様だ。

「ヤベ。携帯忘れた・・・」

と、思いだした様に言つたれおんは由美に車の鍵を借りて体育館を出た。

駐車場に着いたれおんはさつさと携帯を取り、車の鍵を閉めた。・・・と、

「何震えてんだよ、姉ちゃん。」

「なあ良いだろ？遊ぶ位よお・・・」

「や、やめて！」

ナンパだ。

「こんな時代にナンパする馬鹿なんて居るのか」、そう思つたれおんだつたが性格が性格の為に見ぬ振りは出来なかった。そしてれおんは

「何やってんだ。」

「あゝ？うるせーよ。」

ドフッ

一瞬の出来事であつた。れおんは得意な合気道を使つて相手を四方投げ。れおんは「ふう・・・弱い。ナンパするならもつと強くなつてからにしろ。」と言い捨てて去ろうとしていた。

すると、ナンパされていた女子生徒が「良ければ一緒に行きませんか？」と言つて来た。もちろん、れおんが断れる訳がないだろう。れおんの性格であるからだ。

その女子生徒はトップで入学してきたらしく、新入生代表らしく凄い頭の持ち主であつた。

「あ、私は篠塚萌しのつかもえです。貴方は？」

「倉崎れおん。あー、敬語とかめんどいからタメで良いよ。」
「ありがとう。」

そうニコニコと笑った萌は「さ、行こう!」と言い走って体育館へと向かった。

(4) クラスメイトとご対面・

篠塚萌と言う巨乳美少女との出会いがあり、その後体育館に。入学式始まりまで5分だった為か体育館内は緊張感がはしっていた。

入学式終了後、クラス発表があり倉崎れおんは1 - 1、りおんは隣の1 - 2となった。今日は単なる顔合せの様なものだけでお決まりの自己紹介をし、下校となっている。

明日には「新入生歓迎会」をやる予定になっているが、その歓迎会の賞品があまりにも凄い事に毎年の新入生は驚いている。

「自己紹介は名前、出身中学と得意な科目。こんな感じで出席番号準からー。」

1 - 1組担任の30代後半男性教師が言うと、1番の新井と言う者が自己紹介を始めた。れおんがクラス中を見回したところ、人数は20人程度。「あ」の次は「か」位か・・・とかなんとか考えている内に一番の自己紹介は終わった。

「出席番号二番、木崎悠李きさきゆうりです！・・・僕の得意な教科は・・・ないかな？あ、出身中学は諸星学園中等部だよ！皆、宜しくねっ」

この元気が良すぎる自己紹介に皆は拍手をするしかなかった。「こいつ、なんだ・・・」と思っている内に倉崎れおんの番がやってきた。どうやら、この席準は出席番号順であるらしい。

ガタツと倉崎れおんが椅子を立つと女子の視線がれおんへ向いた。それもそのはずだ。恋愛小説などの登場人物にたとえて言うとか、『成績優秀でモテモテな男の子』なのだから。

「倉崎れおん。出身中学は．．．おつぎだいにがくえん桜崎第二学園。得意な教科．．．保体．．．宜しく。」

倉崎れおんの拍手は前の木崎悠李の拍手よりも無駄に大きな拍手だった。その事に気づいたれおんは頭にハテナマークを浮かべたまま椅子に座った。やはり鈍感だ、倉崎れおん。
すると倉崎れおんの机をコンコンと前の席の木崎悠李が叩いてきた。

「れおん君だっけ？君、鈍感すぎるよ。」

「ん？」

「まあいいや．．．おっと、今年のトップ様の自己紹介だッ。」

木崎悠李はそう言うのと倉崎れおんの耳元で「あそこ」と小さく囁いて一番前の席を指さした。

「出席番号５番、篠塚萌です。出身中学はだ．．．じゃなくて、諸星学園中等部です。得意な教科は古典。宜しくね。」

そして、篠塚萌の自己紹介後も無駄に拍手が大きかった。それはそうだ。

篠塚萌は巨乳で美少女、また「萌笑顔」と言う笑顔があり、その笑顔を上げた者は一発KO、女子の場合はその場に倒れ男子の場合は鼻血を出す程。また、メイド喫茶で働いていると言う噂もある。

そして自己紹介が終わり、今日は下校となった。

倉崎れおんと木崎遊李が教室を出る途中、あの巨乳美少女がやって来た。すると周りに居た女子は篠塚萌に、男子は倉崎れおんに目を向けた。

「れおん．．君だったよね？入学式の時ありがとう。」

「れおんでいい。」

「あつ、うん。あの、家って何処にある？私、電車通学なんだけど．．．」

「俺、バス通だから。」

「．．．そ、そつか．．うん、分かった？バイバイ？」

篠塚萌は顔を真っ赤にして教室を出て行った。すると女子と男子の視線は消え、木崎遊李が「鈍感すぎるな．．．」とれおんに聞こえない程の声でボソツと呟いた。

そう、倉崎れおんは鈍感すぎるのだ。

(5) いじめ

倉崎れおんが教室をでると、篠塚萌が隣のクラスのドアに寄りかかっていた。「一緒に帰ろう? / /」

と顔を真つ赤にしながら言うつと倉崎れおんは「別に良いけど . . .」と適当な答えを言った。

突然だが、貴方は「いじめ」を知っているだろうか? そう、よくドラマやアニメなどである上履きをトイレの中にいれたり体操着をベランダから落したり . . . というものである。もつと酷いものは顔面に雑巾をおとす . . . などと言ったものだろうか。今の時代にも「いじめ」は存在する。

そう、ここ、諸星学園高等部にも。

れおん、遊李、萌は靴箱へ来た。そこで目撃したのは

「 . . . ツ . . . 」

「「ぶははははははは?」」

「いじめ」であった。数人の生徒が少女にバケツに入っていた水をかけたのだ。周りにはその生徒、少女とれおん、遊李、萌の数人しかいなかった。それを見た萌は「 . . . 自業自得よ . . . 」と誰にも聞こえない程の声で呟いた。

さて、倉崎れおんはどうしたか。 . . . 性格は性格の為、見ている事は出来なかった。そう、助けに行ったのだ。

「おい、何やってんだ。」

「! あ、えつとお、間違つて水をこぼしちゃってえ . . . / / /」

(うわッ、めっちゃカッコイイ . . .)

「そ、それで今、タオルを貸してあげようと思ってたんです . . .

/ / / /」 (/ / / / / ど、どうしよう . . .)

「 / / / / ご、ごめんねえ . . . 」 (あ、謝った方が良いのかな? / /)

「嘘つきめ。馬鹿、アホ。俺は嫌いだ、嘘つく奴。もちろん、お前達も。」

すると数人の女子生徒は「さ、最悪うつうつうつうつうつと」と叫びながら外へ出て行った。するといじめられていた少女は倉崎れおんに「ありがとうございます・・・」とお礼を言い、靴箱を後にしようとした。

が。

少女はつまずいた。

「危ねっ？」

「え？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・つと。」

現在、抱き合ってる状態。もちろん、顔と顔の間は2？弱、目と目は合っている。こらが抱き合う時の正しい姿勢だ。少女の腕は倉崎れおんが強く掴んだままだった。

この状態に周りの数人の生徒は見て見ぬふり。木崎遊季は「あらら・・・」と呆れたように。篠塚萌は「！」と驚いた顔をした。

「お前、危なっかしい。つか、何もねエじゃん・・・下。」

「よくある事です・・・スミマセン、ドジなんです、私。」

「俺は好きだけど、ドジ娘。あ、俺は倉崎れおん。1-1。お前は

？」

「竹内純ただひつじゅんです。1-2。それ、告白ですか？」

「俺のタイプ。あ、クラス隣だな・・・何かあったら来い、絶対。」

「はい。それ。」「れ、れおん？か、帰ろう？」

いいムードだったところに篠塚萌が倉崎れおんの腕を強く引っ張った。その為、抱き合う姿勢は壊れてしまった。自分的にはそのままあれしてあれしてーって感じが良かったのだが。まあいい。

篠塚萌は倉崎れおんの腕を引っ張り「木崎君！」と呼び靴箱を後にした。

「まさか君がドジ娘ちゃんが好きななんて思ってたなあ？」

「え？あれ、本気の告白だったの？」

「……………タイプはドジ娘。」

「本気の告白だったら面白くなりそうだったのに。それでー、見事両思いになりましたーってなったら僕も応援してあげてたのになあ……………あ、もしかして本気であの子の事好きだったりするのー？」

「あははは。そ、それはないよ木崎君……………」

恋愛話、（恋話）をしている内に篠塚萌が「駅、ここだから」と言っ
つて篠塚萌とは別れた。……………何秒間か沈黙が流れた。

「あの……………」

同時。

「君からで良いよ。」

「……………お前、何者だ？」

「僕は弟キャラという可愛い系キャラだよ？」

「……………まあいい。んでお前は……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5954x/>

非日常はお嫌いですか？

2011年12月1日19時52分発行